～“あのころ”の会報編集委員長からのお便り～
（会報 A4 版への移行 WG 世話人）

～会報が B5 版から A4 版へと大きくなったときのこと～

東北大学名誉教授
会報40巻（2001年）編集委員長；山　村　　力

仙台駅から西方へ 1 km の位置に青葉城址，東北大学川内キャンパスがありますが，さらに青葉山を越えて 1 km 程の自然豊かな山の中に当時，金属博物館がありました．その玄関脇には高炉から切り出された銑鉄の標本が置かれ，1 階に日本金属学会の事務局がありました．会報編集委員会 会報検討ワーキンググループ（以下，WG と略します）の話し合いは，自然に恵まれた環境で始まりました．作業は1992～1993年頃です．ミッションは早急に結果を出す，ということで，頻繁な打ち合わせが要求されることから，メンバーには東北大学の若手が選ばれました．越後谷淳一，長谷川雅之，岡田益男，小野陽および山村力各委員でした．

WG のミッションは，会報を B5 版から A4 版に変更するに当たって，新たな「呼称」の選定，表紙のデザイン，会員交流誌としての記事項目の検討などでした．紙面はこの変更により35％増加し，字も大きくなり，記事配置にゆとりが出来ます．A4 版は32巻（1993年）1 号からの採用を予定していました．とりあえず暫定的に 1 年間，A4 版「会報」の表紙デザインは小野委員の芸術センスに託されました．出来栄えはそのまま永久デザインとしたくなるほどでした．2020 年 4 月号の本連載記事に，歴代の「会報」の表紙が掲載されておりますので，ご参照ください．

会報の呼称については，学会員を対象に公募された結果，多くの案が応募されました．選考に当たり，誌名登録に際して類似と判断される可能性の高い「マテリアル」，「マテリアルズ」関連は選定を避けることになりました．そして，呼称として最終的に，現在の「まてりあ」に絞り込まれました．この名前はラテン語の materia（英訳は matter，substance，material，latent ability）を平仮名で表したもの，と説明書きがありました．技術・工学・理学・教育・芸術などの幅広い分野を背景に持つ重厚な金属学会とのマッチングを感じました．名前が定まったところで，次は本格的な表紙のデザインです．こちらは会報での募集に加えて，広く一般公募も実施しました．金属学会の交流誌の顔ですから，芸術性も期待したためです．こちらも多くの応募を得ましたが，「まてりあ」を毛筆風に描いた文字を含む宮城県在住のデザイナーによるものに決定しました．この表紙は，33巻から38巻まで使用されました．その後，39巻から表紙デザインが変わりましたが，毛筆風の「まてりあ」はそのまま残っているようです．最近の表紙には，大きめに「Materia Japan」と書かれています．今はこれが雑誌の名前としてグローバルには登録されているかも知れません．グローバルに発展している日本金属学会の呼称として相応しいものになっていると感じます．

冊子体の A4 版化に伴って新たに始まった記事カテゴリーであり，現在も残っている二種の記事項目について，少し説明させていただきます．B5 版では「外国文献抄録」がありましたが，これを廃止して，その代わりに「最近の文献から」（現在は「最近の研究」です）が企画されました．研鑽を積んだ見識を読者の財産として共有させて頂くものです．

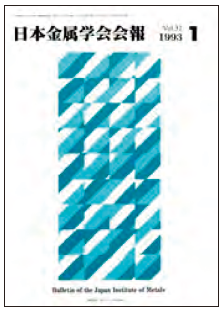
次に「はばたく」です．文字通り，若い研究者の研究動機，内容，あるいは抱負など，若い感性の研究動向を会員に紹介するとともに，執筆者にとっても初心の記録はマイルストーンとして貴重なものになっております．

以上，会報が B5 版から A4 版に発展したときの WG の活動を述べました．

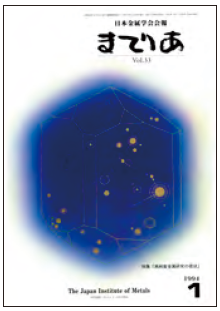
終わりに，WG の活動は事務局の的確な配慮無くしては実現できませんでした．改めて深く感謝申し上げます．

会報「まてりあ」のますますのご発展を祈念申し上げます．

（2021年 3 月 1 日受理）［doi:10.2320/materia.60.361］



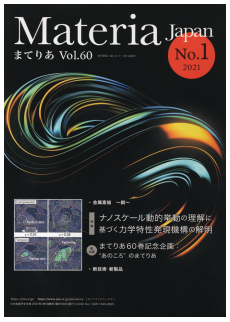
32巻（A4 判に変更）



33巻～38巻

39巻～56巻

57巻～59巻



60巻（現在の表紙）